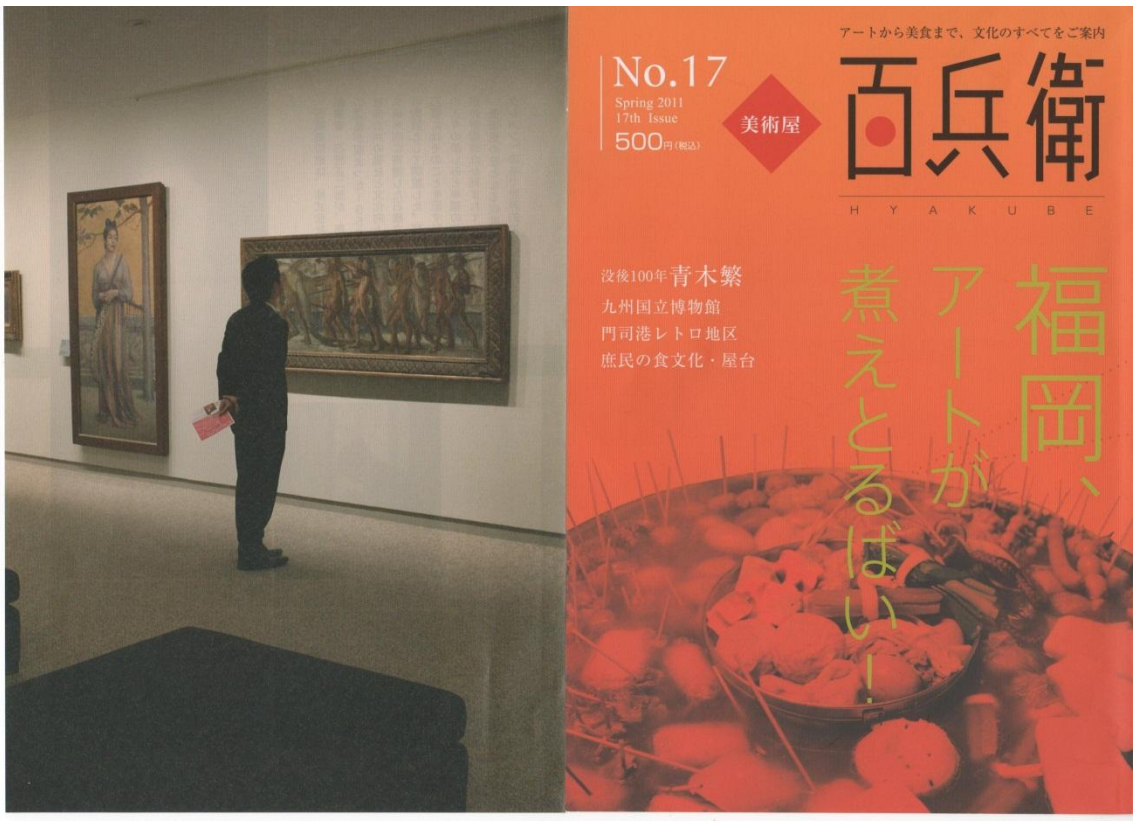
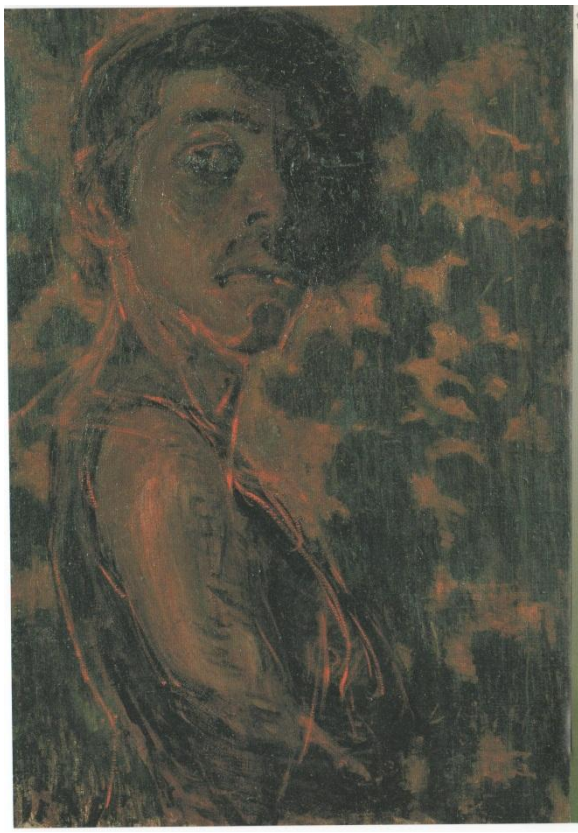


美術屋〈百兵衛〉Spring 2011 17th Issue「没後 100 年青木繁」特集

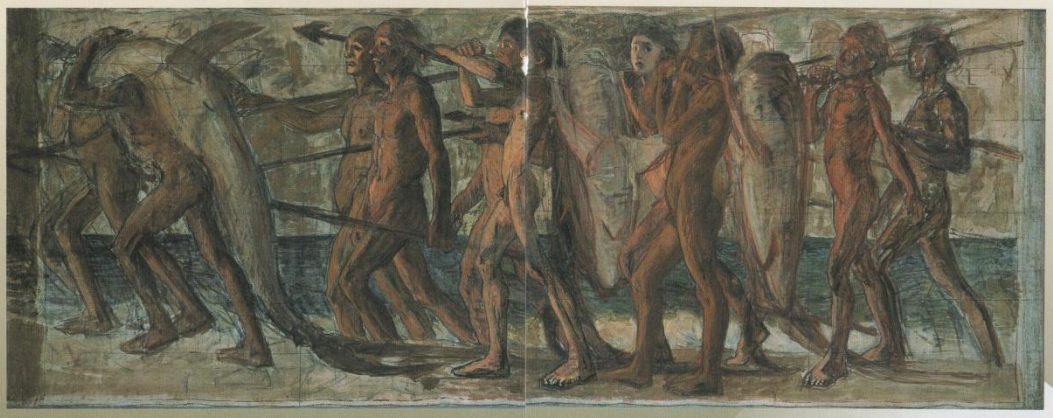


〈自画像〉
1903（明治36）年　石橋財団石橋美術館蔵

伝説に彩られたその画業
青木繁

Profile

1882年福岡県久留米市生まれ。中学明善校在学中、森三郎に洋画の手ほどきを受け、1899年洋画家を志し、中学を中退して上京。同年不同舎に入門し、翌年東京美術学校（現・東京藝術大学）西洋画科選科に入学し、黒田清輝の指導を受けた。1901年、浪漫的神話やケルト伝説、説話の物語に取材した〈黄泉比良坂〉〈潮流漂流〉などを第8回白馬会展に出品し第1回白馬賞を受賞。美術学校を卒業した1904年の夏には、房州布良で〈海の幸〉を制作する。1907年に父危篤の知らせを受けて帰郷。翌年から放浪生活に入り、天草、佐賀地方を経巡ると病苦の内に帰ヶとした。1911年福岡市内の松浦病院にて失意のうちに死去。享年28歳だった。



〈海の幸〉
1904（明治37）年　石橋財団石橋美術館蔵
重要文化財

日本洋画の金字塔『海の幸』

1904（明治37）年夏、東京美術学校を卒業した繁は、友人の坂本繁二郎や森田恒友、恋人の福田たねと一緒に毎年旅行に出かけ、房総半島最南端の小さな漁村・布良（現在の千葉県館山市富崎地区）を訪れた。

4人は近隣の海辺でスケッチを繰り返した。8月のある日、一人で洲崎方面までスケッチに出掛けていた坂本が見た裸の漁師たちの生々しい漁の模様を繁たちに話す。繁は坂本の話に興奮し、翌日にはその現場に行き、漁師たちにその様子を聞き、残された舷の残骸を丁寧にスケッチした。さらに、裸体のモデルに若い漁師や坂本らを招き出し、奥座敷の二間で精力的に描きあげた。これが後に青木繁の名を後世に残し、重要文化財に指定された代表作〈海の幸〉である。この年の秋に開かれた白馬会第9回展に出品された〈海の幸〉は、裸体画であるとの理由から特別室に展示され、限られた観覧者しか観ることができなかったが、一部の識者から大きな反響が寄せられた。

NPO 法人青木繁「海の幸」会が紹介されました。

房総半島最南端の漁村で描かれた青木の最高傑作

1904（明治37）年の布良滞在中、繁は《海の幸》以外にも何点かの秀作を描いている。23頁の《海景（布良の海）》もそんな作品のひとつ。《海の幸》が画家の見事な想像力を示しているとすれば、この作品は繁の別の一面、優れた写実力を充分に証明している。印象派を彷彿とさせるそのタッチの中には、自然の美しさの本質を捉え、絵画作品として再構成しようとする意欲が感じられ、押し寄せる波の力感なども見事に表現されている。事実、坂本繁二郎など友人たちの中には、彼の想像画よりも写実画の方を高く評価する者も少なくなかった。

しかし、それでもやはり青木繁の最高傑作は、《海の幸》であると断言しても良いだろう。他の者には真似のできない壮大な構想。力強く迫ってくる構図。大胆なデッサン。海と波と人々が織りなす美しい諧調。詩人で美術史研究家でもあった木下杢太郎は、後に画集『海の幸』で繁について、「青木氏は自分の頭の中に一つの完全な世界を持つて居た人である。その世界は形象的の系統で統一せられた思想（詩）の世界である」と評した。《海の幸》はまさに木下が言う、繁の頭の中で生み出された完璧な詩の世界を絵画化したもの。制作にあたって最初に引かれたグリッド状の線や木炭の素描、薄塗りの彩色や黒や赤の輪郭線が残るこの作品は、発表当時から未完成作として批判されることもあったが、それを補うに余りある魅力を備えているのだ。優れた想像性と作品の未完性という青木繁作品の特性を併せ持つ《海の幸》は、繁自身と明治浪漫主義的絵画にとっての金字塔であると言えるだろう。

青木繁の代表作である《海の幸》制作の舞台となった小谷家。築130年を経て現存するこの貴重な文化遺産は、2009年、館山市の有形文化財に指定された。小谷家住宅を保存・修復するとともに、芸術文化の振興や啓発活動を行う目的で著名画家や美術評論家、研究者などが発起人となって2010年に設立されたのが、NPO法人 青木繁「海の幸」会である。同会では文化財保存のために協力できる会員を現在も募集中。詳細についての問い合せは下記連絡先まで。

《海の幸》が描かれた南房総布良の小谷（こたに）家

TEL・FAX 044-945-5473　携帯 090-1600-2823　事務局：吉岡友次郎
URL：http://uminosac.web.fc2.com　E-mail：tama937@yahoo.co.jp　神奈川県川崎市多摩区菅北浦3-2-40

NPO法人 青木繁「海の幸」会